

十一月五日

十二時大学、沖縄計画メモ。理工総研メモ作成。鈴木隆之・藤井誠一共著500万円の家をつくらうと思つた読む。意外なところに継承者が現れたな。鈴木隆之はこの物件を彼のキャリアの中の特殊解にならぬような努力の方法を産み出す必要を迫られるだろう。しかし、500万円というのは確かに激安だな。中国製の何かを使つたりしたんだらうか。ここまでやると価格破壊の様相を呈してくるが、大事な事は建築家として鈴木隆之がキッチンと生活してゆく事でもあるのだから、その費用を一つ一つの物件でいかに捻出するか工夫、ヴィジョンが必須になる。あと書き読んではいけない。石井和紘さんから、「都市を創造してきた巨匠たちの至言」の帯がついた本が送られてくる。都市の地球学のタイトルだ。槇文彦、原広司、黒川紀章と共に語っている。石井さんらしい本だが少々大時代だな。十四時理工総研所長。総研は良く私の様な乱暴者の面倒を見てくれたと思う。十五時過上海スタジオのディナーを李祖原と決めにかかると。上海市長、同済大学学長等とのディナーの設定など、李の自然なポリテイカル感覚に触れる。多分、想定しているプログラムは李祖原の意志が入り、上海の政治的縮図を示すものにもなりそう。その後李祖原とおしやべり。いつも彼と話していると形の起源の話になるのが不思議だ。近い将来中国で何等かのコラボレーションをしようという

事になる。しかし、美術館とかを李と、どうやってコラボレーションするのか見当もつかぬ。岡本太郎以上の対極主義的振舞いになるのかな。

世田谷に戻つたら伊藤毅先生より「大江戸日本橋絵巻」熙代勝覧の世界。送られてきていた。絵巻から見る都市江戸は、それはそれは美しいものだった。今のイタリアの例えばヴェネチアを想わせる位だ。こういう努力を続ける建築史家もいるのだ。江戸の日本橋の商店街には看板建築は一つも見当たらない。商人は皆、店頭へのれんをかけた。それがずらりと並んでいる様は本当に美しい。風にそよいでファサード、街並みがユラユラ揺れていたのだろう。今の原宿建築よりもメディア建築だった。こののれんは何処でどのように、つくられて、かくの如きに微妙に町並みとしてコントロールされていたのだろうか。知りたいと思つた。江戸日本橋の商店街は実に柔らかい、揺れ動く表情であつたのだ。この柔らかさはもう都市には取り戻せないのかな。伊藤先生から送つていただく本は実に読むのに骨がいたのだが、読まねばならない。何故だかそう思い込んでいたのである。

十一月六日

十時半研究室。十一時学科会議室入江主任と外国人交換留学生宿舎の件その他で相談。国際化とは突き詰めるところ宿舎の問題である。イエールもオレゴンもサンパウロもバウハウスも全て学生、教員宿舎は完備している。早稲田は辛いものがあるのだ。十二時半井上宇市フェローシップ面接。十三時教室会議。理工学部再編の件が中心。入江主任は良くやっている。十七時半迄。途中抜けてスケッチ作業。長い会議は辛い。中川武教授と久し振りに再会。アンコールワットの仕事は延々と続いているようだ。十八

時日用品ミーティング。二〇時半終了。